

【展覧会評】

「内藤ルネ展 ～夢見ること、それがわたしの人生～」

2019年11月23日～2020年1月13日

岡崎市美術博物館

国際ファッション専門職大学 小山有子



図1 「内藤ルネ展」チラシ

1 はじめに

2019年秋から2020年1月まで、愛知県岡崎市出身の内藤ルネ（1932-2007）（以下、ルネ）の展覧会「内藤ルネ展 ～夢見ること、それがわたしの人生～」が開催された。会場は岡崎市美術博物館（マインドスケープミュージアム）、小高い丘の上にあって、ガ

ラス張りの館内から景色を一望できる博物館である。

展覧会のチラシ（図1）にあるように、ルネのキャッチコピーは「Roots of Kawaii」である。執筆時点の2020年10月、森永乳業のアイスクリーム「ピノ」のパッケージは「ピノかわいいパッケージ50」として展開中であるが、そこでもルネは「ルーツかわいい<sup>1)</sup>」

として登場している。

本展覧会は、ルネに関して何度か開催されている展示（すでにパッケージ化されていると思われる）をほぼそのまま踏襲しているようだ（岡崎での本展には初出展作品が約 20 点、約 300 作品が展示）。そのため、展覧会評としては、本稿では岡崎市での展覧会開催のために企画された「特別展示」に注目したい。また、展示で数多く見られたルネの「製品」について少々述べたい。

本展の構成は以下の通り。

#### 特別展示 岡崎ゆかりの品

- 第 1 章 夢のすべてはここから始まった！
- 第 2 章 少女たちの夢 ルネガール誕生
- 第 3 章 恋する女性たち 美の集大成へ
- 第 4 章 ルネの中の妖精たち 夢をカタチに
- 第 5 章 魔女の独り言 自分らしさの探求
- 第 6 章 夢は時間を超えて ルネブーム再燃

また、展覧会に即したイベントとしては以下の講演会が開催された。いずれも参加がかなわず残念であった。

#### 1) 2019 年 11 月 30 日

講師：中村圭子氏（弥生美術館 学芸員）  
「内藤ルネの光と影」

#### 2) 2019 年 12 月 8 日

講師：笹井孝介氏（NHK 制作局 ディレクター）  
「内藤ルネと性的マイノリティーの歴史」

2019 年 3 月には、展覧会に先行するかたちで、市内の岡崎公園で期間限定の「ルネカフェ」も開店したという。展覧会開催時は、内藤ルネデザインのマンホール（メンテナンスホール）のフタを写真に撮ると、記念品がもらえるというイベントも行われた。

展覧会自体は岡崎市内の岡崎市美術博物館（マインドスケープ・ミュージアム）で開催された。余談となるが、岡崎市には、岡崎市立美術館と、ルネ展が開催された岡崎市美術博物館がある。市民はどちらの館で開催か迷うことはなかっただろうか。せめて、新しくできた方の名称に変化をつけることはできなかったのだろうか…。

## 2 故郷・岡崎でのルネ展

内藤ルネは 1932（昭和 7）年に岡崎市で生まれ、この地で、師である叙情画家・雑誌編集者、中原淳一の雑誌『それいゆ』と出会い、編集部に出紙を出し続けた。やがて淳一から「東京へいらっしゃい」と招かれて上京するまで、子ども時代からティーンエイジャーの、もっとも多感な時期をルネは岡崎で過ごしたと言えるだろう。

そんな岡崎での本展のもっとも特徴的な展示は、第二室にあたる「特別展示 岡崎ゆかりの品」であろう（ややもすると他室の展示はパッケージ化されたものが巡回しているかもしれない）。本展は、この第二室以外のほとんどが撮影許可という、展覧会としては異例のものだったが、「特別展示」だけは撮影禁止であった。

それはここで展示されるものすべてが「個人蔵」であり、筆まめなアーティスト・内藤ルネから直接に、きわめてプライベートなメッセージが寄せられているためであろう。展示されている資料は、別室でも展示されているルネのグッズと同じものもある。しかし、そのグッズと特別展示の資料が異なるのは、それらにはルネのサインがあり、ルネ自筆のはがきやカードがともなっていることだ。この特別室の展示資料だけでも、ルネの筆まめぶりが来館者に伝わることだろう。

特別室だけのリーフレット「岡崎ゆかりの品 リーフレット」によれば、「故郷・岡崎での展覧会にあわせ、市政だより 2019 年 4

月 15 日号にて、『内藤ルネにゆかりのものを探しています!』と呼びかけ、「小学校時代の恩師」と「そのご家族、親戚、ルネの実家のご近所さん、小学校の同級生」などから資料が寄せられたという。また、資料だけでなく、「当時のエピソードや直筆の手紙」、写真やプレゼントされた人形なども含め、「岡崎でゆかりのあった人々から聞き取り調査」を行い、それらの成果も資料展示に反映されていた。

実際わたしが訪れた日には、展示室には杖をついた年配の女性が来られており、関係スタッフが出迎えているところだった。その年配の女性は展示資料を見ながら「懐かしい」と話し、ルネを「イーちゃん」と呼んでいた。立ち聞きするのは失礼にあたることだったが、どうやら女性はルネの小学校の同級生らしく、「彼は優しい男の子だった」「女の子たちとよくお人形で遊んでいた」と話は続い

ていた。

### 3 ルネと作品、銀色のメッセージ

ルネを知る人びとから寄せられたメッセージと、ルネによる直筆のメッセージを見るにつけ、彼の人柄があふれ出るようだ。作品に記されたルネのサインは、一般的な「サイン」だけにおさまらず、人形のパッケージに記されたそれは、さながらメッセージでもあり模様でもあり、製品に施された作家自身の装飾でもある。贈られたそれらのルネの手による製品は、ルネによってデザインされたものであり、大量に製造されたルネの作品のひとつでもある。銀色のペンでハートマークと「with LOVE」というメッセージが描かれたパッケージを見て、筆者は思い出すことがあった。

実は筆者自身、ルネから同じ銀色のペンで



図2 内藤ルネ 2005 年卓上カレンダー、記されたサイン（筆者蔵）



記されたサインを思いがけなく受け取ったことがある。2004年、当時、インターネットでスタートしたばかりのルネショップでカレンダーやこまごましたものを購入した折、届いたそれらには、ルネ自身から筆者への宛名入りのサインがなされていたのだった。サインはリング式カレンダーの表紙だけでなく、1月と2月にまで銀色の文字で輝いていた。これにはかなり驚かされ、心躍ることであった。内藤ルネ本人からのサインをもらってしまった！ この製品の送り主は会社名としての「内藤ルネ」であると同時に、個人の、作家の内藤ルネだったのだ。

これについては嬉しい反面、実際の使用がためらわれ、非常に困ったことも事実だった。筆者はルネの製品を飾るために購入しなかったのではなく、予定を書き込むなどして、「使いたかった」。このような、作家本人からのサインの入った品を、気にせず使える人はあるだろうか。また、そうした製品を、次の年になったからといって、捨てることができるだろうか。筆者にはそれができず、こうしてルネカレンダー 2005年版は本棚に置かれ、2021年現在までの16年間を過ごしてきたのだ。

当時はこのサインを、ただただ「先生はお優しい方なのだ」と嬉しく思っただけだった。しかし、本展のような大規模な展覧会を顧み、当時とは異なる視点から、ルネと、製品となった彼の作品について少々述べたい。

#### 4 製品という作品

本展ではルネの作品が約300点展示されたと先に述べたが、直筆作品だけでなく、その多くは雑誌や小物雑貨、グッズと呼ばれる製品である。中原淳一の発行した『ジュニア それいゆ』に始まり、数々の少女向け雑誌、その付録、単行本は「第2章 少女たちの夢」に、ルネがデザインし、一世を風靡したパン

ダのグッズは「第4章 ルネの中の妖精たち」に、所せましと展示されており、圧巻であった。原画と製品を見比べ、紙に描かれた丸いパンダが、つるりとした陶器の貯金箱となる不思議な感覚にとらわれた。まるでVRだ。紙からパンダがぞろぞろと大量に出てくるようなのだ。

とはいえ、すべての製品の原画が残っているわけではないという。展示のキャプションには、ルネは原画を残すことに重要性を感じていなかった、ともあった。これは興味深い点だ。もし、この展示がルネ製品だけであつたら、どこか物足りなさを感じてしまうだろう。製品は、たしかに作家がデザインしたものではあるが、作家の手による原画があつてこそ、美術館の展示だ。これは雑誌やその付録も同じだろう。雑誌は雑誌だからだ。本来なら、雑誌は図書館に配架されるものであり、実際に手にとることのできるもので、見たり読んだりできるものだ（美術館ではガラスに阻まれて、手に取ることはできない）。『ジュニア それいゆ』などは発行部数の多い人気雑誌であり、貴重ではあるだろうが、稀覯本とは言えない。

ルネの作品や発表の場がこうした雑誌や製品であること、そしてルネ作品は印刷され、生産されてこそその輝きを放つものだと、編集者であり、ルネのマネージャーでもあった本間真夫はこう記している。

締め切りに追いまくられ、もともと、それまでの画家のように流麗でいい絵ではなく、色塗りもスミ線も原画は荒々しいものだったが、印刷になると別物のようきれいで迫力が出た。カラージュもしたし、内藤は印刷向きの画家なのだった。[内藤 2002: 46]

原画が残っているわけではない、というだけでなく、本間によれば「何せ本人は原画はおろか出版物・製品などはほとんど残してい

ない」らしい〔内藤 2002: 47〕。どのような分野のアーティストでも、人気があればあるほど——需要が大きければ大きいほど——、同じ作品は大量に製造され、人の手に渡る。ルネの場合は、1枚の紙の原画から、多くのグッズが世に羽ばたいていったわけである。「印刷向きの画家」、製造向きの作家というのは、きわめて今日的だ。

そう考えると、ルネは作風だけではなく、作品の方向性も、作品への姿勢も、昭和時代の人気の作品であったとしても、きわめて現代的な感覚を有している。例えば、現在はさまざまな分野において、作品制作がパソコン上で完遂する。この時、人は何をもってして「原画」と呼ぶのだろうか。そしてわたしたちはそれらを何の「展示」を見るというのだろうか。コンピューターの端末に映るそれを、プロジェクターで大きく映写されたそれを「作品」と呼ぶなら、原画とは何だろうか。原画とは「オリジナル」を意味するものであるが、0と1で構築される作品の「オリジナル」とは何か、考えざるを得ないだろう。

とはいえ、ルネの作品はデジタル作品ではない。デジタル作品ではないのだが、21世紀的感覚を先取りしている。本稿の初めて述べたように、ルネは「かわいい」という観点から取り上げられ、また、そのルーツであることを強調されることが多いが、今回の展覧会でその輪郭がはっきりしたことは、ルネ作品の製品性、大量生産に耐えるデザイン、色彩感覚などの観点からもう少し丁寧に検証・考察できるのではないかということだ。ぜひこの視点からの「内藤ルネ論」を待ちたい。

そのように考えたとき、ルネの手を離れた

作品（製品）は、再度、ルネの「オリジナル」たりえた。岡崎での展覧会の「特別展示」の人形たち——ルネから直接、友人知人へ贈られたもの——は、ルネ本人によってサインが記され、ハートや星などのデコレーションが施されていたからだ（しかも心づくしの送り状も添えられて！）。今回の展覧会は、大規模な里帰り展にふさわしい、ルネ自身の手による「特別展示」の「オリジナル作品」が見どころのひとつであったと言えるよう。

#### <注>

1) パッケージは、赤地に白のドット、本展覧会リーフレットでも左上部に配されている『ジュニアそれいゆ』1960年5月号表紙の少女が配されたもの。このパッケージについて、ピノのホームページでは以下のように説明されている。「かわいい文化の生みの親と称される内藤ルネに由来を持つ「かわいい」。デフォルメされた大きな目の美少女イラストや日本初のパンダキャラクターなど新しいかわいさを次々に提案。幼稚な印象として使われていた「かわいい」の表現を現代のイメージへと導き確立させた。まさに現代かわいいのルーツ。」

#### <参考文献>

内藤ルネ 2002『内藤ルネ——少女たちのカリスマ・アーティスト』河出書房新社（2002年弥生美術館「内藤ルネ展」時に発行されたもの）。  
2003『季刊プリンツ 21 特集 内藤ルネ』No.66（2003年春号）、プリンツ 21。

ピノ（森永乳業のホームページ）<https://www.pinoice.com/lp/kawaii/> 2020年10月20日閲覧